

## 古典の日

### 奥の細道

松尾芭蕉

黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。  
 剃捨て黒髪山に衣更 曾良  
 曾良は河合氏にして惣五良と云へり。芭蕉の  
 下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。  
 此たび松嶋・象沔の眺共にせむ事をよろこ  
 び、且ハ羈旅の難をいたはらんと、旅立晝髪  
 を剃て黒髪にさまをかへ、惣五を改めて宗悟と  
 ス。仍て黒髪山の句有。「衣更」の二字、力  
 有てきこゆ。  
 二十余丁山を登つて滝有。岩洞の頂より飛  
 流して百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身を  
 ひそめ入て、滝の裏よりミレバ、うらみの滝  
 と申伝へ侍る也。

#### 四 黒髪山



栃木県日光にある真見の滝。山岳信仰の行場  
 のひとつとされる「芭蕉庵」トコロも提供

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉  
 集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)  
 から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

しばらくは滝にこもるや夏の初

### 芭蕉と詩人大使クローデル

「黒髪山」の章は同行者曾良の紹介に始まる。芭蕉の東西の旅にはしばしば門人が随行したが、芭蕉は大概の場合、紀行文の中に温かい言葉でその人の名と人柄を紹介した。故尾形竹山氏によれば、これは中世以来の日本の紀行文では他に例を見ないことだといふ。新興文藝俳諧ならは同志としての連帯意識の表明、門人のさらなる精進への励ましの意味でもあったろうか。それにしては曾良の「剃捨て」の句はさほど面白いとも思えない。曾良は今回の旅立ちにあたって頭を剃り、衣も黒髪に替えて来た。ところが、その名も黒髪という男体山の麓に着いてみると、ちょうどその日が冬から夏への衣更の日(旧四月一日)だったと、半ば興じつつ、あの出立の日の修行への志を新たにしたいのだらう。これを師芭蕉は「衣更」の二字、力有てきこゆ」とほめた。少しほめすぎではないか。冒頭の「黒髪山は霞かゝりて雪いまだ白し」に対応させるなら、少々突飛だが、こんな短詩のほうがかびびきが高く、似つかわしい。

独り行く。口にはこの一握の芹、目には見あぐる峯頭一抹の雪。午後三時。

これは李白や杜甫の句ではない。大正期の駐日フランス大使ポール・クローデルの俳句風短唱集『白扇帖』(一九二七)の一首(山内義雄訳)。彼は中禪寺湖畔の大使館別荘によく籠って詩作に打ちこんだ。

夜明け 男体は白根に放つ 大いなる金の矢  
 も、霊山とその西の白根山との、朝の光の中の神話的な対決をとって美しく、男体山麓の大森林に射す曙光の動きを眺めては

緑の森の 動かぬ闇のなかから 緋いろのどよめき  
 (以上、芳賀訳)

これも、ほとんど芭蕉の「青葉若葉の日の光」に匹敵しよう。その芭蕉の本意は、真見の滝の瀧裏にしばしば静坐して夏籬り九十日の仏道修行の初めとしてよつと一句は、曾良の句にこたえを返しながら、さすがに聖地にふさわしくすがすがしい。

芳賀徹さん とたずねる  
 おくのほそ道



### 千年の古典脈々と受け継ぐ

日本は世界の中で、千年の昔の古典籍が現在にも伝わる類いまれな国である。こう書くと、

#### 古典と私

いや世界にはギリシア神話がある、エジプトのフアラオの物語があると聞かれるかもしれない。しかし、それらは、そ

冷泉家当代夫人 冷泉貴実子 さん



れが生まれた頃の典籍によって現在に伝えられているわけではない。いくに編み込まれたものである。エジプトのパピルスに書かれた象形文字もパピロンの楔形文字も、紀元前より人類の文明の証しではあるが、現在そこに住む人々の直接の先祖のものではない。中国もまたしかり。交替する王朝は、常に先王の王朝を否定し、壊した。現存するのは、墓の中や敦煌文書のように、一度は忘れ去られたものであ

つもの民族が交替し、また混じり、先の王朝を否定し、何百年も忘れられ、また再発見されて、新たな

これに対して、日本の古典は、古今和歌集、源氏物語、新古今和歌集、土佐日記等々、ほとんど千年間、いつの時代も文化の中心位置を占めて来た。一度も忘れ去られはしなかった。そして、古い写本が現在も伝えられている。

その多くの写本を造ったのが藤原定家であり、それを今に伝えたのが冷泉家である。



金福寺境内の風景。奥に見えるのが芭蕉庵(京都市左京区)

### 俳諧の聖地とされる左京・金福寺

って安永年間に再興され、句会も開かれたという。したがって、蕪村をはじめ呉春、景文等とのゆかりも深く、背後の丘には蕪村の墓や近世の俳人の句碑があり、俳諧の聖地とされる。

うき我をさびしがらせよ閑古鳥 芭蕉  
 我も死して碑に込せむ枯尾花 蕪村  
 また、金福寺は舟橋聖一の歴史小説『花の生涯』のヒロイン・村山たか女が尼として入寺し、14年間の余生を送り、67歳の生涯を閉じた寺としても知られている。

(NPO法人・都草 櫻井英成)

#### 文学ウォーク

真如堂(京都市左京区)で向井去来の墓に詣で、哲学の道を北上して高浜虚子を始め多くの俳人に愛された法然院に寄り、その後、白川通を30分ほど歩けば、詩仙堂、曼殊院、円光寺などがある一乗寺界隈にたどり着く。

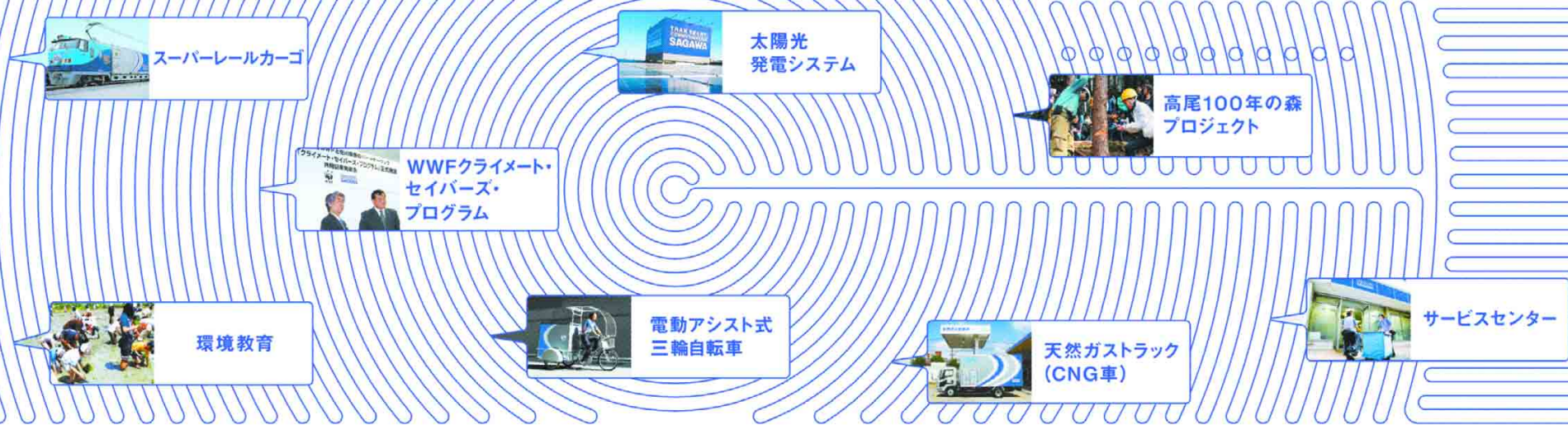
金福寺は、叡山電鉄「一乗寺駅」(京都市左京区)から徒歩で約20分の所にある。宮本武蔵と吉岡一門の決闘で有名な「一乗寺下り松」の近くにあり、この寺の後ろの丘に建つのが「芭蕉庵」である。元禄の頃、金福寺を復興した鉄舟和尚と親しかった松尾芭蕉がしばしば訪れたことから、村人はこの庵を「芭蕉庵」と呼ぶようになった。その後、荒廃したが、芭蕉を敬慕する与謝蕪村とその一門によ

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

## 親しむ

ひと、社会、未来は、青い糸でつながっている。

TRANSPORT IS COMMUNICATION.



「ひと、社会、未来を支えて」という気持ちが、佐川急便のCSR。私たちの環境対策は、グループの総力を結集します。